

マルコ14章32-72節 「捕えられるイエス」

1A ゲッセマネの祈り 32-42

2A 裏切りと逃亡 43-50

3A 不正な裁判 51-65

4A 敵にある火 66-72

本文

それでは、マルコによる福音書 14 章を開いてください。後半部分、32 節から読んでいきます。

1A ゲッセマネの祈り 32-42

32 さて、彼らはゲツセマネという場所に来た。イエスは弟子たちに言われた。「わたしが祈っている間、ここに座っていなさい。」33 そして、ペテロ、ヤコブ、ヨハネと一緒に連れて行かれた。イエスは深く悩み、もだえ始め、34 彼らに言われた。「わたしは悲しみのあまり死ぬほどです。ここにいて、目を覚ましていなさい。」

イエス様たちが、ゲツセマネの園まで来ています。ここはオリーブ山の西側の麓にあったと言われていますが、ゲツセマネは、「オリーブの圧搾機」の意味です。オリーブを圧搾することによって油を搾り出すのですが、同じようにしてこれからイエス様が祈られる祈りは、まるで圧搾機にかけられて、絞り出されるような祈りです。イエス様は十一弟子を連れて来て、それからさらにペテロ、ヤコブ、ヨハネ三人だけをもっと近くに連れてきました。この三人は、ヤイロの娘のよみがえりと、高い山での変貌での時と同じですね。

イエス様に死んでしまうほどの深い悩み、もだえ、悲しみが襲ってきます。それで、この三人に、「目を覚ましていなさい」と言われました。これは夜が遅いので、それでも目を覚ましていなさいという意味もあるし、祈っていなさいという意味です。イエス様があまりにも苦しくなり、悲しみにつぶれそうになっています。しばしば、イエス様は神の御子だから、簡単に父なる神の御心に従えたのではないか？と誤ってしまいますが、実は、イエス様も人間として十分に、十字架の苦しみがとてつもなく恐ろしいものであったのです。

35 それからイエスは少し進んで行って、地面にひれ伏し、できることなら、この時が自分から過ぎ去るようにと祈られた。36 そしてこう言われた。「アバ、父よ、あなたは何でもおできになります。どうか、この杯をわたしから取り去ってください。しかし、わたしの望むことではなく、あなたがお望みになることが行われますように。」

イエス様は三人からも少し離れて、祈られ始めました。「この時が自分から過ぎ去るように」と言われます。イエス様は、何度となく「この時」という言葉が使われていました。「ヨハ 12:27 「今わたしの心は騒いでいる。何と言おうか。『父よ、この時からわたしをお救いください』と言おうか。いや、このためにこそ、わたしはこの時に至ったのだ。」イエス様は、この時のためにこの世に来られたことを知っておられても、なおのことこの時が過ぎ去るように祈られたのです。これは、弱虫の祈りでしょうか？いいえ、イエス様が人として当然の祈りだったのだと思います。私たちも、御心と分かりつつも、それでも「このようにしてください」と祈るのは、逆に御心に従う心備えをしてくれます。

そして、「アバ、父よ」と呼びかけておられます。アバは、お父ちゃんという意味です。自分のお父さんのようにして神に祈られています。何でもできるのだから、この杯を過ぎ去らせてくださいと祈られています。その杯とは何か？神の怒りの杯が聖書にはあります。そのまま体で受ける時に、杯を飲む表現を使います。それで神の罪に対する御怒りを受けられるということです。今、イエス様がお父ちゃんと祈られているのは、ご自身が罪を負われることによって、神の怒りがイエス様に留まり、神から見捨てられるようになってしまうということなのです。永遠の昔からこの方の懐におられた方が、引き離される瞬間なのです。これほど恐ろしいことはないということです。

しかしこの間に、イエス様は死なれた後の栄光を神に見せていただいたのかもしれませんが。「ヘブル 12:2 信仰の創始者であり完成者であるイエスから、目を離さないでいなさい。この方は、ご自分の前に置かれた喜びのために、辱めをものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されたのです。」イエス様が死なれて甦られた後に、多くの魂が神によって勝ち取られている姿をご覧になったのかもしれませんが。前に置かれている喜びです。

「しかし、わたしの望むことではなく、あなたがお望みになることが行われますように。」というのが、すごいですね。これこそが祈りの醍醐味でしょう。父なる神が望まれることになるように、ということです。神の御心に従う、服従すること、明け渡すこと、これこそが勝利をもたらします。ゆだねられた魂というのは、威力を発揮します。どんなことが来ても、揺らぐことなく、果敢に試練の中に入ることができるからです。イエス様の戦いはこの場で終わりました。この後、十字架の死に至るまでの道を歩まれますが、実は勝負はここで決まりました。イエス様はここから揺らぐことはありません。これこそが、神の御心だと心得ておられたからです。霊の戦いは祈りが主戦場です。そして、その祈りは神に自分を従わせることができるかどうか？で決まります。

37 イエスは戻り、彼らが眠っているのを見て、ペテロに言われた。「シモン、眠っているのですか。一時間でも、目を覚ましていられなかったのですか。38 誘惑に陥らないように、目を覚まして祈っていなさい。霊は燃えていても肉は弱いのです。」

先ほど、「たとえ、ご一緒に、死ななければならぬとしても」とペテロは言ったばかりです。それ

なのに、今は、眠ってしまっています。そして、祈りの生活から離れると、誘惑に陥ることが分かります。ここでイエス様が、「霊は燃えていても肉は弱い」とあります。そうです、私たちは「神さまに従います。」という思いは強くあります。けれども、肉が弱いのです。パウロはこの葛藤をローマ 7章で話していました、「7:18 私は、自分のうちに、すなわち、自分の肉のうちに善が住んでいないことを知っています。私には良いことをしたいという願いがいつもあるのに、実行できないからです。」だからこそ、私たちは肉が十字架に付けられたことを知って、自分ではなく、御霊に拠り頼むのです。

39 イエスは再び離れて行き、前と同じことばで祈られた。40 そして再び戻って来てご覧になると、弟子たちは眠っていた。まぶたがとても重くなっていたのである。彼らは、イエスに何と言ってよいか、分からなかった。41 イエスは三度目に戻って来ると、彼らに言われた。「まだ眠って休んでいるのですか。もう十分です。時が来ました。見なさい。人の子は罪人たちの手に渡されます。42 立ちなさい。さあ、行こう。見なさい。わたしを裏切る者が近くに来ています。」

イエス様は実は、三度、先ほどと同じ祈りを捧げました。ここからも分かるのは、祈りは何度、同じものを繰り返してしまってもよいということです。イエス様はそういったところでも人間の弱さを身にまといおられ、祈りにおいて心が定まるようになっていくのです。そして、「まだ眠って休んでいるのですか。」というところは、別訳で、「もう眠って休みなさい」となっています。イエス様は彼らのために祈られたのかもしれませんが、ご自身が祈りが必要だと、そばにいてほしいと先ほどは言われていましたが、父なる神によって強められ、そして弟子たちの信仰のために気づかっておられたのです。

時が来た、と言って、「人の子は罪人たちの手に渡されます。」と言われますが、イエス様の逮捕劇、またユダヤ人による裁判は不正の連続でした。当時の裁判についての規則をことごとく破る者でした。自分たちがイエスを罪に定めましたが、それをやりながら自分たちが罪を犯します。

2A 裏切りと逃亡 43-52

43 そしてすぐ、イエスがまだ話しておられるうちに、十二人の一人のユダが現れた。祭司長たち、律法学者たち、長老たちから差し向けられ、剣や棒を手にした群衆も一緒であった。44 イエスを裏切ろうとしていた者は、彼らと合図を決め、「私が口づけをするのが、その人だ。その人を捕まえて、しっかりと引いて行くのだ」と言っておいた。45 ユダはやって来るとすぐ、イエスに近づき、「先生」と言って口づけした。46 人々は、イエスに手をかけて捕らえた。

ここから、罪の生々しい姿が見えます。まず、その罪とは十二人から出ているということです。十二人の一人ユダが裏切りに来ています。それから、祭司長、律法学者、そして長老たちです。宗教指導者らから罪が出てきています。私たちが、罪について、社会にいる極悪人のことを考える

のではなく、実はイエスを十字架に付けたのは、内輪の人たちだったのだということを思い出す必要があります。罪とは、自分自身のことを取り扱うのです。

今は夜で、昔は懐中電灯も、モニター写真もなく、このようなイエスを近しく知っている内通者による情報が必要でした。それが口づけでした。しかも、この口づけは、少しするものではなく、ギリシア語では、情熱的にする口づけです。すごい裏切りです。彼の口からは、「先生」つまり「ラビ」としか呼びかけていません。主よ、とは言えないからです。

47 そのとき、そばに立っていた一人が、剣を抜いて大祭司のしもべに切りかかり、その耳を切り落としました。

彼は、ヨハネの福音書によれば、ペテロです。耳を切り落としましたが、ルカの福音書によれば、イエス様はすぐに耳を元に戻しました。

48 イエスは彼らに向かって言われた。「まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持ってわたしを捕らえに来たのですか。49 わたしは毎日、宮であなたがたと一緒にいて教えていたのに、あなたがたは、わたしを捕らえませんでした。しかし、こうなったのは聖書が成就するためです。」50 皆は、イエスを見捨てて逃げてしまった。

聖書が成就する、そうです、まず過越の祭りの時にイエス様が捕えられるのは、聖書が成就するためです。子羊がキリストを示しているからです。そして、数多くの預言がキリストの死を預言していました。さらに 50 節、皆が見捨てて逃げてしまった、とありますが、これもゼカリヤ書にある、羊が散ってしまった、の成就であります。これら起こっていることが、決して単なる人間の営みで起こったのではなく、すべて神のご計画にしたがって、預言を成就するかたちで起こっているということです。

51 ある青年が、からだに亜麻布を一枚まとっただけでイエスについて行ったところ、人々が彼を捕らえようとした。52 すると、彼は亜麻布を脱ぎ捨てて、裸で逃げた。

罪は宗教指導者の間に、そして弟子たちの間にもありました。みなが逃げてしまったのです。そしてここに、ある青年のことが書いてあります。彼が裸で逃げたという恥ずかしいことですが、おそらくマルコ本人なのではないか？と言われていています。マルコはまだその時は少年または青年でした。聖書は興味深いことに、自分の情けない部分もそのまま書き記しています。

3A 不正な裁判 53-65

53 人々がイエスを大祭司のところに連れて行くと、祭司長たち、長老たち、律法学者たちがみな

集まって来た。

当時の祭司はカヤパと言います。みなが集まって来たとありますが、これはサンヘドリンというユダヤ人の統治機関です。サンヘドリンを召集するのは、神殿の中にある「裁判の殿堂」と呼ばれる所で行ないますが、カヤパの家で行うのは、だれかの家で裁判を行うようなもので、当時も違法でした。

54 ペテロは、遠くからイエスの後について、大祭司の家の庭の中にまで入って行った。そして、下役たちと一緒に座って、火に当たっていた。

ペテロが、遠くから付いて来ました。勇敢ですね、けれども彼のやる気は、せめてここまでののです。私たちも、自分はイエスについて行くのだと自分の力を信じて、その頑張りも、遠くから、そして敵と一緒に火に当たっている、というところまでしかないのです。

55 さて、祭司長たちと最高法院全体は、イエスを死刑にするため、彼に不利な証言を得ようとしたが、何も見つからなかった。56 多くの者たちがイエスに不利な偽証をしたが、それらの証言が一致しなかったのである。

これはリンチと言ってもいい、滅茶苦茶な裁判です。ユダヤの裁判では初めに弁護、次に告訴が始まりますが、いきなり告訴です。そしてここにあるように、偽証ばかりが出てきています。

57 すると、何人かが立ち上がり、こう言って、イエスに不利な偽証をした。58 『わたしは人の手で造られたこの神殿を壊し、人の手で造られたのではない別の神殿を三日で建てる』とこの人が言うのを、私たちは聞きました。59 しかし、この点でも、証言は一致しなかった。

イエス様が言われた、神殿を壊してみなさい、三日で建てると言われた、ご自身の体について言われた箇所です。神殿破壊は、ローマ法で死刑に値するだったそうです。ローマに引き渡して、死刑にしてもらおうとして、こんな偽証を立てました。

60 そこで、大祭司が立ち上がり、真ん中に進み出て、イエスに尋ねた。「何も答えないのか。この人たちがおまえに不利な証言をしているが、どういうことか。」

サンヘドリンでは、被告に不利な証言を迫ってはいけないことになっています。ですから、この尋問自体が違法です。けれどもイエス様は、イザヤ書 53 章の預言を守っておられました。「53:7 彼は痛めつけられ、苦しんだ。だが、口を開かない。屠り場に引かれて行く羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない。」

61 しかし、イエスは黙ったまま、何もお答えにならなかった。大祭司は再びイエスに尋ねた。「おまえは、ほむべき方の子キリストなのか。」62 そこでイエスは言われた。「わたしが、それです。あなたがたは、人の子が力ある方の右の座に着き、そして天の雲とともに来るのを見ることになりま

す。」
ついに確信的な尋問になっています。「ほむべき方の子キリスト」かどうか？ということです。穂むべき方の子、というのはもちろん神の御子のこと。そしてキリストは、油注がれた方であり、救い主のことです。メシアが神の子であることを、当時の大祭司は認めていました。今、ユダヤ教ではメシアは人間であって神ではないと言います。けれども、イザヤ 9 章 6 節など、ダビデの王座から生まれるキリストが、神によって与えられた御子であることが預言されています。

そしてイエス様の言葉がダニエル 7 章 13 節にある、キリストについての預言です。メシアが戻って来られる時に、天の雲とともに戻ってこられます。

63 すると、大祭司は自分の衣を引き裂いて言った。「なぜこれ以上、証人が必要か。64 あなたがたは、神を冒瀆することばを聞いたのだ。どう考えるか。」すると彼らは全員で、イエスは死に値すると決めた。65 そして、ある者たちはイエスに唾をかけ、顔に目隠しをして拳で殴り、「当ててみる」と言い始めた。また、下役たちはイエスを平手で打った。

イエス様が、ほむべき方の子キリストであることを証言されて、それでこのように死刑にされた、ということが大事です。この方がキリストだからこそ、神の御子だからこそ、その身代わりの死が私たちを罪から救うのです。

そして、イエス様に対する侮辱ですが、頭に目隠しをしているので、その殴られた衝撃はひとたまりもないです。殴られる時というのは、瞬時にその衝撃をよけています。けれども目隠しをされると不意打ちで殴られるので、衝撃が酷く強くなります。イザヤが預言しました、「50:5-6 【神】である主は私の耳を開いてくださった。私は逆らわず、うしろに退きもせず、打つ者に背中を任せ、ひげを抜く者に頬を任せ、侮辱されても、唾をかけられても、顔を隠さなかった。」

4A 敵にある火 66-72

66 ペテロが下の中庭にいますと、大祭司の召使いの女の一人がやって来た。67 ペテロが火に当たっているのを見かけると、彼をじっと見つめて言った。「あなたも、ナザレ人イエスと一緒にいましたね。」68 ペテロはそれを否定して、「何を言っているのか分からない。理解できない」と言って、前庭の方に出て行った。すると鶏が鳴いた。69 召使いの女はペテロを見て、そばに立っていた人たちに再び言い始めた。「この人はあの人たちの仲間です。」

ペテロがイエス様否定を始めています。言われているのが、召使いの女です。そのような弱い存在から問われて、彼は恐れから否定をしてしまったのです。

70 すると、ペテロは再び否定した。しばらくすると、そばに立っていた人たちが、またペテロに言った。「確かに、あなたはあの人たちの仲間だ。ガリラヤ人だから。」71 するとペテロは、嘘ならのろわれてもよいと誓い始め、「私は、あなたがたが話しているその人を知らない」と言った。

ペテロの話し方には、ガリラヤ弁があったのでしょうか。そしてペテロは何と、嘘なら呪われていても良いという誓いまで立てています。

72 するとすぐに、鶏がもう一度鳴いた。ペテロは、「鶏が二度鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言います」と、イエスが自分に話されたことを思い出した。そして彼は泣き崩れた。

泣き崩れました。彼の姿は、真実な信仰を持つための、ある意味、プロセスなのかもしれません。神の国に入るためには、必ず通らなければいけないのは、子供のような信仰、へりくだりです。神の国を建てると思っていたペテロたちは、イエス様の十字架を聞いて躓きました。そこから、自分がどんな地位に就くかを気にしました。イエス様は過越の食事の後に、みながつまずくと言われました。それで、私は決してあなたを見捨てたりしないと断言しました。そして眠ってしまう。剣という、自分の肉で戦おうとする。最後は、イエス様から遠く従っていき、敵の火で暖を取っていたのです。そこで必要だったのは、自分がこんなにも弱き存在で、自分には何もできないということを知った者が、復活のイエス様の命にあずかれるということです。

この彼が、イエスさまによって教会の指導者に立てられているということです。兄弟たちを立ち直らせ、人々を養い、育て、手紙を第一、第二を書きました。最後は、逆さ十字架に付けられて殉教したと言われます。私たちの神の恵みがここにあります。私たちがどんなに失敗したとしても、遠く神に離れていたとしても、主に立ち返る時、神の国の真ん中にあることができるようになるのです。